令和8年度　学校だより　11月号　　２０２６年１１月４日

たかはま



千葉市立高浜海浜小学校発行　Ｎｏ．７

前向きに立ち直り　再び歩みだす力

校　長　　村元　孝憲

霜降を過ぎ、朝晩の冷え込みからも季節の移ろいを感じます。10 月 14 日（水）の始業式に始まった後期も、３週間が経ちました。始業式では子どもたちに対して、「掃除」にしっかりと取り組んでほしいと話しました。黙って、集中して行うことで、校内も美しく、心もきれいな子どもたちに育ってもらうことを望みます。

学校では様々な避難訓練を実施していますが、先月 19 日（月）には津波を想定した訓練を行いました。本校は海抜（海面を０mとした陸地の高さ）3.9mに位置し、津波が発生した際には緊急避難場所として指定されています。当日はなぎさ保育園の園児も参加し、地震が収まった後３階へ避難、その後、屋上へと避難しました。「実力の上限」という言葉がありますが、いざ災害や緊急事態、試合などで本番を迎えたとき、人は緊張や混乱から、普段の訓練や練習以上の行動をとることはできません。初期行動の徹底とともに、放送を正確に聞き、安全に避難行動ができるように積み重ねていきたいと思います。

また、２３日（金）には全校遠足を実施し、１年生から６年生までのフレンド班で活動しました。グループ別のウォークラリーでは職員が出題する問題に答えながら回りました。優勝した 4-C グループの皆さん、おめでとうございます。その後は班ごとにドッジボールやパルコース（遊具）で楽しく遊びました。保護者の皆様には、早朝よりお弁当のご準備、ありがとうございます。

さて、近年「レジリエンス（resilience）」という言葉が学校教育において注目されています。元々、物理学用語として「弾力性」や「回復力」を指す言葉でしたが、精神医学や心理学の分野では「心の回復力」「立ち直り力」と訳され、幅広く研究されています。教育界では困難な状況やストレス、逆境に直面した際に、前向きに立ち直り、再び歩み出す力を表します。

ではなぜ、子どもたちにレジリエンスが必要なのでしょうか。それは、大人も子どもも程度の差こそあれ、困った状況に出会わない人はいません。そのようなとき、「決して折れない強い心」が必要なのではなく、「つらいことがあっても、落ち込んでも、また立ち直るしなやかな心」が大切です（ゴムボールがへこんでも、すぐ元に戻るようなイメージ）。

成長の過程で、子どもたちは様々な挑戦や失敗、人間関係の悩みに直面します。例えば新年度の新しい環境への適応、学習の習得、友達とのけんか…これらの困難にぶつかったとき、レジリエンスが高い子は一時的に落ち込んでも立ち直り、問題解決に向かって取り組むことができます。逆に低い子は、必要以上に自分を責めたり、無力感に苛まれたり、目の前の問題から避けようとしてしまいます。

学校の活動には、子どもたちのレジリエンスを育む要素がたくさん含まれています。友達とのかかわり合い、学習への挑戦、行事への参加。それぞれにおいて壁にぶつかるかも知れません。そのようなときにこそ、周囲の大人が寄り添い、励まし、努力や過程を認めてあげることが、子どもの心の回復力を育む大切な支えとなります。後期もよろしくお願いします。